

2018年11月3日(土・祝)



司会：
大塚 みさ

実践女子大学 短期大学部
日本語コミュニケーション学科 教授

香、満ちました

「香道」と日本語コミュニケーション学科とのゆかりは深く、佐藤辰雄教授の発案により2000年に「香の文化」を正規科目として開講して以降、多くの学生が香道に親しみ、理解を深めてきました。今回の公開講座は、この香道をさまざまな角度から見つめるもの。御家流香道二十三代宗家・三條西堯水氏にお話をいただくほか、香道の祖・三條西実隆の実像に迫る講演や、会場で実際に香道を体験する聞香が行われました。

講演

神秘の香木—沈香—

薬師寺東京別院での香席で本学サークル・香道研究会にご指導をくださるなど、本学との関わりも深い御家流宗家をご登壇。香道において欠かせない存在である香木「沈香」について、ご自身の体験を踏まえ興味深いお話をお聞かせくださいました。

■繊細な香りのちがいを聞きわけて楽しむ香道

「香木」といえば、香道の世界では「沈香」と「白檀」を指します。中でも沈香は非常に興味深いものです。沈香はジンチョウゲ科のアクイリア・アガローチャという木の樹脂から採れます。この木は東南アジアに生えるもので、日本では自生していません。傷がついた時などに、木は樹脂を分泌します。その後、木が枯れて地中に埋もれても、樹脂は腐食せずに残り、沈香となります。しかし、樹脂がどのようにして良い香りを持つ沈香となるかのメカニズムは解明されていません。つまり、沈香が採れるまでには長い年月がかかるとともに、木を栽培して樹脂を採ったとしてもそれが良い香りを持つかどうかはわからないということです。沈香は元来貴重なものですが、人類が利用しすぎたため希少なものとなり、現在は輸出国政府の証明書があって初めて商業利用できる、ワシントン条約の希少品目第2種に指定されています。

香道では、沈香を「伽羅・羅国・真南蛮・真那伽・佐曾羅・寸間多羅」の6種に分類します。沈香は自然のものですから、伽羅に分類されたとしても同じ香りは一つとしてないどころか、1本の木から採れた沈香が場所によって別の種に分けられることもあります。

もともとは仏教寺院や日本の香道、お線香などで利用されてきた沈香ですが、現在その利用者は、アラブの王族や中国の富裕層などワールドワイドに広がっています。しかし細かく分類して楽しんでいるのは、恐らく日本の香道だけだと思います。私たちの手元に来た時、その沈香ができてからどれ位の時を経たものなのかはわかりません。しかし何百年経っていても、保存状態が良ければその香りは薄れず残っています。香道の世界では古い香木ほど珍重されます。香道では「馬尾蚊足」、香木を貴重なものとして馬の尾や蚊の足のようによく小さくして使います。この後、聞香の時間もありますので、ぜひ香木の香りを楽しんでいただければと思います。



講師：三條西 堯水 氏
御家流香道二十三代宗家



▲スライドを用いながら、沈香について楽しく詳しい解説がなされました。

講演

貴紳残照—「香道の祖」三條西実隆

「香道の祖」とされる三條西（三條西）実隆は、実際はどのような人であったのか。『実隆公記』などの資料から印象深いエピソードを抽出しながら、営々と築き上げられながらも光を失いつつあった平安文化最後の継承者としての人となりや浮き彫りにしました。

■多芸多能な努力の人、「人間好き」が魅力の源泉

長年仕えた下女や官女が死期を迎えると「貴人の邸内での死はタブー」という古来からの社会規範に則って家から出す記述が日記『実隆公記』に見られるなど、実隆は伝統的な考え方や文化に生きる人だったことがうかがえます。しかし深い悲しみも書き留めており、人としての情も篤く持っていた姿が浮かび上がってきます。実隆は若い頃から学問に励み、貴族が重用されるために必須の素養であった漢文や漢詩、和歌や書を修得し、特に和歌や書で大家に数えられるなど類を見ないほどの文化人となりました。そこに平安貴族の復権を望み、その在り方を再生しようとした彼の思いを読み取ることができます。三條西家は、三條家（転法輪）の分家である正親町三條家のさらに分家にあたり、就ける位の最高が大臣でした。1506年、後柏原天皇への哀訴が実って内大臣の位に就きますが、数か月後には辞任せざるを得ませんでした。昇進しても家庭経済にあまり意味はありませんが、名誉に生きる実隆にとって内大臣の位はとても重要なもので、その後も長く復位の執念を抱いていたようです。

実隆は香道の祖とされますが、その根拠は明らかではありません。本間洋子氏は『中世後期の香文化』に次のように記します。「三條西家の宗家である転法輪三條家は薫物に関して特別な立場に立っており、三條西家の人物がその三條本家を継承する時期があったことが、両家が混同される一因となった」「香合の記録『名香合』の奥書に実隆が跋文を記しているが、これがさまざまに流布する中であたかも実隆が指導する香合であったかのような印象を与えたので、彼が『香道の祖』と考えられるように至ったのではないかなど。傾聴に値します。

実隆は実に多芸多能であり、また大変な努力もしました。しかし彼の魅力は「本当の人間好き」（『室町期』山崎正和）にこそありましょう。人はさまざまな長所と短所を合わせ持つ存在ですが、実隆はそのすべてをひっくるめて人を好きになっていたことが『実隆公記』を読むとつくづく感じられます。実隆が天皇や將軍家の寵遇を得たのは、誠実で親和性が高い人柄故のことでしょう。



講師：佐藤 辰雄
実践女子大学 短期大学部
教授

質疑応答

Q 香木の保存方法を教えてください。

A 古来の書物には「竹の紙で包み、鉛の箱に入れて保管する」とありますが、現在ではこの方法を実現すること自体、非常に費用がかかります。茶筒などに入れて保管する方法が良いと思います。

質疑応答

Q 実隆は幼少期に父を亡くした後、どうやって家計を維持したのでしょうか？

A 各地にあった荘園から収入を得ていたようです。しかし下克上の時代で、管理する武士に取られてしまうこともあり、家計は決して楽ではなかったと推測されます。

香を聞く

御家流で香道の師範を務める講師が、香席での作法や使用される香木の種類といった基礎知識を聴講者に伝授。会場には香木の伽羅と佐曽羅を焚いた香炉も回され、実際に聞香を楽しむ機会も提供されました。

■心の中にも香りが満ちるひとときを

香道では、香炉を使って香木の香りをかぎます。これを「香を聞く」といいます。香席に集まっている人が順に香炉を回してお香を聞きます。自分のところに香炉が回ってきたら、傾けないように気を付けながら右手で取り、左の手の平に乗せまします。そして香りを逃がさないように右手でふたをし、親指と人差し指の間にすきまをつくり、鼻を近づけて3回聞きます。香炉は器の中に灰と炭団が入ったもので、断熱の役割を持つ銀葉の上に香木を置きます。香木に直接火をつけないため、煙が出ず、香木そのものの香りを良い状態で楽しめるようになっています。

香道で使う香木は6種類に分けられます（下図参照）。今回、皆さんに伽羅



講師：小畑 洋子 氏
御家流香道師範
実践女子大学 短期大学部
非常勤講師

と佐曽羅を聞いていただきます。これは香木の中で最上級のものでされていますが、価値ではなく、その香りが自分にどのように語りかけてくるのかを味わってください。香木と対話しメモを取って、その香りは自分にとってどういふものかをご自身の言葉で表現していただきたいと思ひます。

香席では、前方に香をたき出す「香元」と香席の記録を書く「執筆」が座し、上座から下座に向かって香炉を回します。参加者は、香元が香を立てるお点前を見て香炉が回ってきたら聞き、出てきた香の順番などの答えを手記録紙に書きます。執筆が参加者の答えを記録。最高得点者に、組香名や香組、答えや日付、会場などが書かれた記録が贈られます。

香木は聞いた時だけ香り、それが記憶として残ります。その記憶も香炉を次の人に回すとだんだん薄れていきます。けれど自分の中に何かが残っている。どうして香道をしているのかよく聞かれますが、感動するような香りに出会いもう一度聞きたいと思う体験が香道を続ける原動力になっているのではないかと思います。香りと向き合い、その香りが自分にとってどんなものなのかを考へることが香道の素晴らしさなのではないかと感じます。

「香満ちました」という言葉が香席の終わりの挨拶です。これは香りが部屋の中にほかに満ちることに由来しますが、今日の講師が、皆さんの心の中に香りが満ちるひとときとなったのであればうれしひです。



▲会場の一人ひとりに、「香を聞く」体験が提供されました。

【香木の種類】

記号	木所	五味
一	伽羅（きゃら）	辛 からい
二	羅国（らくこく）	甘 あまい
三	真南蛮（まなばん）	酸 すっぱい
ウ	真那伽（まなか）	無 あじなし
花一	佐曽羅（さそら）	鹹 しおからい
花二	寸間多羅（すもたら）	苦 にかい

展覧会

場所：実践女子大学渋谷キャンパス 創立120周年記念館1階 プレゼンテーションルーム

名筆で知られる三條西実隆公の書のほか、本学・香道研究会所蔵の香道具など、貴重な品の数々を展示。なかなか目にするのできない名品を間近に見る機会を、講演の前後に聴講者にお楽しみいただきました。

▶ふたを外した「沈箱」(写真右奥がふた)。香木や薫物を入れる金蒔絵の箱で、中には懸子(底の浅い箱)と6個の小箱が収められています。香道研究会所蔵。



▲手前が「若松藪絵十種香箱」。香道具を納める蓋付きの重箱。貞明皇后(1884-1951)の御遺愛品と伝えられます。香道研究会所蔵。



▲写真左が香炉。香を聞くための三脚の器で、必ず一対で使用されます。香道研究会所蔵。



▲三條西実隆公の書「七絶四行並和歌」。漢詩と和歌を並べた趣向で闊達に書かれています。小畑洋子氏所蔵。

来場者アンケートから（抜粋）

- 香道についてのお話を伺うのは初めてで、大変興味深くお聞きすることができました。(女性・10代・実践女子高等学校)
- 香道初心者で基礎知識がまったくない状態でしたが、とても興味深くお話を聞かせていただきました。(女性・50代・学外)
- 御家流宗家のお話を伺ったり、実際に香炉で香木を聞いたり、貴重な経験をさせていただきました。香道具などの展示も素晴らしいです。(女性・40代・学外)
- 土曜の午後、ゆったり楽しいひとときを過ごすことができました。「香」を楽しむ「きっかけ」をいただきました。(男性・60代・学外)